2026 2.23 vol.1138

JAグループ

JA全農ウィークリー

JA ZEN-NOH WEEKLY

2面
第9回和牛甲子園に全国43校が集う
（畜産総合対策部）

6-7面
「91農業」SNSでPR
（耕種総合対策部）

Web版
JA全農ウィークリーは
こちらから
https://www.zennoh-weekly.jp/

配送先変更（住所・宛名）、
配布部数変更はこちら
https://forms.office.com/r/yUWVHyVVtK

全農 ZEN-NOH
食と農を未来へつなぐ。

News!

全日本卓球に協賛し選手を激励

優勝選手へ国産黒毛和牛＆全農直営店舗の食事券を贈呈

広報・調査部

全農は1月20～25日に東京都渋谷区で開催された卓球の日本一を決める「2026年全日本卓球選手権大会（一般・ジュニアの部）」に協賛しました。優勝選手に副賞を贈呈したほか、会場で国産農畜産物の魅力を知ってもらう抽選会などを行いました。

25日に行われたシングルス男女の表彰式では、桑田義文理事長が優勝した松島輝空選手（木下グループ）と張本美和選手（同）に副賞として、国産黒毛和牛を各30キロと全農直営・みのりみのるブランドの飲食店舗で使用できるお食事券を贈呈しました。

また、会場に「全農ブース」を出展し、全農所属の石川佳純さんの卓球教室「石川佳純47都道府県サンクスツアー」の完走を記念したパネルや副賞を展示しました。

土、日曜日には、国産農畜産物の魅力を知っていただく抽選会を実施し大会を盛り上げました。

参加者には「農協ごはん」「みんなのやさい」や「農協マヨネーズ」などの賞品と、賞品にまつわる「知っトク情報」が書かれた卓球ラケット型カードをプレゼントしました。

これからも全農は卓球日本代表のトップパートナーとして「ニッポンの食」を通じて卓球競技を応援します。

桑田理事長が副賞を贈呈

大会を盛り上げた抽選会

News!

第9回和牛甲子園に全国43校が集う

鹿児島県立市来農芸高校が総合評価部門最優秀賞に

畜産総合対策部

全農は1月15、16日、東京都港区で第9回和牛甲子園を開催しました。25道府県から43校、65頭が出品され、出場校数、出品頭数ともに過去最多となりました。総合評価部門の最優秀賞は、鹿児島県立市来農芸高等学校が受賞しました。

和牛甲子園は、和牛を飼育する全国の農業高校の生徒、"高校牛児"たちの大会です。和牛飼育に関する日頃の取り組み内容を競う取組評価部門と、育てた和牛の肉質を競う枝肉評価部門の2部門で評価し、両部門の合計得点で総合評価部門の最優秀賞を選出します。

全農は、将来の担い手候補である高校生の就農意欲の向上と日本各地で同じ志を持つ高校生同士のネットワークを創出し、意欲と技術の向上を図ることを目的に和牛甲子園を開催しています。

総合評価部門で最優秀賞を受賞した鹿児島県立市来農芸高等学校は、取組評価部門で「窮地からの脱却～和牛王国、若人たちの挑戦～」をテーマに発表し優良賞に、枝肉評価部門ではA5等級、BMS12の素晴らしい枝肉により優秀賞をそれぞれ受賞しました。

今後も全農は、和牛甲子園を通じて全国の"高校牛児"を応援していきます。

全国から集まった"高校牛児"

取組結果報告会に参加した日比常務や伴走者ら

学んだ知識や気付きを報告しました

AgVenture Lab

JAアクセラレーター第7期 伴走者が報告会

スタートアップ企業から学んだ知識・気付きを共有

JAグループ全国8団体が設立したAgVenture Lab（あぐラボ）は12月10日、昨年5～11月にかけて実施したＪＡアクセラレータープログラム第７期における全農伴走者の取組結果報告会を実施しました。

【AgVenture Lab】

報告会には日比健常務理事、新妻成一参事が参加しました。伴走者がスタートアップ企業へのサポートを行う中でつかんだ学び・気付き、全農とスタートアップ企業の違い、取り入れたい要素、全農の課題などを報告しました。

講評で日比常務は「発表を聞いていると、学びや気付きが共通してあったように思う。スタートアップ企業には熱量があり、人間としても魅力にあふれた人が多いと感じた。ロールモデル的な人物に出会えたのは良い経験だと思う。また、当初の提案から、現場の意見に応じてビジネスモデルを柔軟に変えて実証したという話があった。全農の事業においても柔軟さは大切。日頃の業務の中でもひとつ先のことを見てやってみると楽しいと思う」と話しました。

新妻参事は「今回の気付きを自らの業務の中でどう生かすのかを意識してこれからも頑張ってほしい。伴走活動で、スタートアップ企業やそれ以外の関係者らとつながりができたと思う。そのつながりを継続してほしい」と期待を寄せました。

伴走者からは「伴走を通じて自分の今までの経験や今後について見つめ直すきっかけになった」「自分にはなかった角度からの質疑があり、自分でも考えるきっかけになった」「JAグループとしての全農が進化する余地の大きさを感じた」などの感想がありました。

ＪＡアクセラレータープログラムは３月から第８期伴走者を募集します。皆さんの応募をお待ちしています！

JAアクセラレーター HPはこちら

肥料、農機から生産者の農業経営を強化

県内資源活用肥料を開発、農機センター通じJA支援

長崎県本部は県内産の資源を活用した肥料の開発と広域農機センターを開所しました。肥料コストの削減や環境保全、農機のアフターサービスの強化、人材育成につなげ、JAと一体で生産者の経営を支える基盤を強化していきます。

肥料コスト低減に向け 県内資源活用肥料開発

JAグループ長崎は資材・肥料費の高騰対策として、県内畜産堆肥の利用拡大による肥料の安定供給とコスト低減を目的に、県内産豚ぶん堆肥を活用した肥料を開発しました。豚ぶん堆肥をペレット状に造粒したもので、一般的な堆肥に比べてリン酸含有量が高い点に着目し、肥料原料として利用しています。

2020年度から堆肥ペレットを配合した新肥料の実証実験を進めており、現行肥料と同等の作業性・収量性を維持しつつ、肥料コストの削減が期待できます。農水省が掲げる「みどりの食料システム戦略」における「化学肥料の使用量20％低減（2030年目標）」にも寄与する取り組みです。

現在は、温州みかん栽培向けの「ペレットみかんエコスター」、バレイショなど露地野菜向けの「BBダイナミックエコスター」を開発しており、製造は県内の土壌特性・栽培条件に応じた指定配合肥料の製造実績を持つ、くみあい肥料㈱が行います。

ペレットみかんエコスター

BBダイナミックエコスター

今後はエコスターシリーズの普及に向け、県内全JAでの供給拡大に取り組んでいきます。

JA農機事業を支える 県本部広域農機センター

オリジナル肥料開発に加え、長崎県本部では農機修理整備担当者の高齢化や人材不足の解消を目的に、2025年10月に「県本部広域農機センター」を開所しました。大型・高性能農機のアフターサービス拠点として、JA農機事業を補完する役割を担うほか、高度な技術を持つ人材の育成や農機担当者の技術研修施設としても機能します。

農業機械の大型化、高性能化、ICT搭載が進む一方で、修理整備を担う人材不足は喫緊の課題です。広域農機センターの活用で修理整備事業の効率化を図り、県域全体で組合員サービスの向上につなげます。

県本部では、肥料コスト低減と農機事業の体制強化という両面から、生産者の経営を支える基盤づくりを進めており、今後も県域全体で持続的な農業経営に貢献できるよう取り組みを継続していきます。

アフターサービスの拠点となる農機センター

JAズームイン

秋田県種苗交換会に食堂出店
女性部のおもてなしに長い列

JAこまち（秋田県）

概要	2025年3月31日現在
正組合員数	6775人
准組合員数	2802人
職員数	297人
販売品取扱高	71億6千万円
購買品取扱高	27億9千万円
貯金残高	668億3千万円
長期共済保有高	1790億3千万円
主な農産物	米、花き、ネギ サクランボ、リンゴ セリ、キュウリ、トマト

JAこまちは秋田県内陸南部に位置し、東は奥羽山脈、西は出羽山脈など豊かな緑に囲まれています。管内の農業は「あきたこまち」を中心とした米をはじめ野菜、果樹、花き、畜産など、県内でも有数の複合産地を形成しています。

女性部食堂の受付。4日間で867組が訪れました

食堂には列ができ連日大盛況。食材を追加して提供しました

部員の手作り品も展示。じっくり目を凝らす人も

地場産の豚汁・牛丼が盛況

湯沢市で5日間にわたり開催された第148回秋田県種苗交換会に、JAこまち女性部食堂が出店しました。地元食材を生かしたメニューと活気ある接客で、多くの来場者を迎えました。

メニューは、地元加工グループが雄勝産大豆で仕込んだみそを使った豚汁や、湯沢産新米を使った牛丼のほか、うどんなど。価格は全て600円（税込）以内とリーズナブルで、会期中4日間の営業で1558食を売り上げる盛況ぶりでした。会場には女性部員が手掛けた手芸作品やクラフト品も展示され、多彩な活動に多くの人が足を止め見入っていました。

今回の食堂運営には、こまち女性部の10支部から40人が参加。今年の4月に合併となるJAうご女性部も協力し、事務局職員も合わせて総勢56人での連携が実現しました。初対面の部員も多く、現場では自然と声を掛け合い分担しながら作業。終盤には「女性部食堂をきっかけに交流できて楽しい」との声も聞かれ一体感が育まれました。

JAとも連携 新たな企画も

昨年4月に就任した女性部部長の菅恵美子さんは、「夏からの準備が実を結びました。女性部活動の輪をさらに広げるためにも、気軽に参加できる組織を目指したいです」と話してくれました。

また、同JAでは、気軽な学びの場として「女性大学」を毎年開催しています。2年を1期として8期を数え、今期も11月から新たな期がスタートしています。みそづくりや健康教室など、実用的な講座を通して日頃から絆を深めています。

同JA営農部営農企画課の今昭子さんは、「女性部の活発さを生かし、新たな催しや講座も企画していきたい。女性部食堂の連携を弾みに、支部交流会も実現したい」と意気込みを話します。地域の女性たちの活力とチームワークが光った秋田県種苗交換会での成功は、今後の活動の広がりを予感させるものとなりました。

自家製みそづくりに挑戦

「91農業」SNSでPR

インスタ開設、日常に1割農作業を

全農は日常生活に農作業を1割取り入れてもらう「91農業（きゅういちのうぎょう）」を推進しています。この取り組みをさらに広げるため、農業との新しい関わり方を紹介する「91農業」の公式インスタグラムを開設しました。現場の雰囲気や、さまざまな参加事例を発信しています。ぜひご活用ください。

【耕種総合対策部】

企業連携研修（TOPPAN 労組によるブロッコリー収穫）

基幹的農業従事者が減少 地域農業の未来に危機感

日本の農業は今、大きな転換点を迎えています。農林業センサス2025年速報値によると、基幹的農業従事者数は約102・1万人と前回調査から25・1％、実に34・2万人も減少しました。特に60代以上の減少が顕著で、23・9万人が離農しています。その結果、平均年齢は2020年の67・8歳から67・6歳とわずかに若返りましたが、依然として高齢化の進行は深刻です。農業を支える担い手が減り続ける現状は、農畜産物の安定供給だけでなく、地域経済や環境保全にも大きな影響を及ぼす可能性があります。

さらに、農業経営体のうち約7割は後継者を確保していません。こうした課題を抱える地域では、労働力不足が生産性の低下や、雇用機会の減少、人口流出や高齢化の加速など、さまざまな問題につながっています。地域の農業を守り、持続可能な形で未来へつなげるためには、多様な人が農業に関わる新たな仕組みづくりが不可欠です。

こうした状況を打開するため、全農が提唱する新しい取り組みが「91農業」です。〝あなたのライフスタイルに農業を1割取り入れてみませんか？〟というコンセプトのもと、地域農業を応援しながら、多様な人の農業への関わりを広げることを目指しています。

副業や旅行の一コマでも 関わり方は人それぞれに

「91農業」は、副業として休日に農作業をする「9本業1農業」、旅行の合間に農業に触れる「9旅行1農業」など、気軽で多様な関わり方を提案しています。アルバイトやパート、援農ボランティア、ワーケーションなど参加の形は自由。農業は〝専門的で難しいもの〟というイメージを持つ方も多いかもしれませんが、「91農業」では、もっと身近に、もっと気軽に、誰もが農業に参加できる環境づくりを進めてい

ボランティア（兵庫県三連＝中央会・共済連・全農）による丹波黒枝豆の収穫

ます。

実際に参加された方々からは、「農作業を通じて地域の魅力に気づいた」「その地域の農産物を積極的に買うようになった」といった声が多く寄せられています。農業に関わることで、その土地の食や人とのつながりが生まれ、地域のファンになる人が確実に増えています。

JAグループでは、「91農業」を全国的に広げるべく、2024年10月の第30回JA全国大会でも重点的に推進する方針が掲げられました。農業現場の労働力不足解消はもちろん、地域の雇用創出、農業者の所得向上、移住促進、新規就農のきっかけづくりなど、「農業」を軸とした地方創生を目指しています。

アルバイト（愛媛みかんアルバイター）

小さな一歩の積み重ねが地域を守る大きな一歩に

さらに、この活動をより多くの方に知っていただくため25年10月、「91農業」公式インスタグラムを開設しました。農作業の様子や最新情報を、毎週2回（月・木曜夜）に発信しています。また、JAグループ最大の登録者数約115万人を誇るYouTubeチャンネル「ゆるふわちゃんねる」でも紹介動画を公開中です。ぜひご覧ください。

農業にほんの少し関わることで、地域が元気になり、未来の食が守られていく――

「91農業」は、皆さんと地域をつなぐ新しい架け橋です。ぜひあなたの生活にも、農業というエッセンスを〝1割〟取り入れてみませんか？

YouTube「91農業紹介動画」

ゆるふわ
ちゃんねる

91農業
紹介動画

「91農業」のInstagram開設

これまでの投稿例

主な投稿内容

❶ 91農業の概要
❷ 大学生農業イベントでのかぼす収穫／菜果野アグリ（大分）
❸ 料理専門学生によるさつまいも収穫／やまもとファーム（宮城）
❹ 黒枝豆収穫ボランティア／全農・系統県連職員（兵庫）
❺ ラフランス収穫／JTB・農作業請負（山形）
❻ 全農職員による農作業実習／やまもとファーム（宮城）
❼ 野菜ソムリエの91農業／全農職員（島根）
❽ 全農職員によるみかん収穫支援／わかやま援農隊（和歌山）
❾ 短期アルバイトによるみかん収穫／みかんアルバイター（愛媛）
❿ アグリサポーターによる農作業支援／JAセレサ川崎（神奈川）

1 ONE MORNING
JA全農提供FM番組（TOKYO FM/JFN38局）
毎週水曜日7：20～7：27
農業の最新の動きや、農業から学べる生活の知恵を紹介しながら
『食と農の未来』について考える番組です。

日本アクセス展示会に全農グループで共同出展

全農は、1月28日、29日、横浜市内で開催された「日本アクセス東日本春季フードコンベンション2026」に全国農協食品㈱、全農パールライス㈱、JA全農青果センター㈱、JA全農たまご㈱、JA全農ミートフーズ㈱、全農チキンフーズ㈱、TACの店6団体と共同出展しました。

【営業開発部・耕種総合対策部】

今回全農グループとして初出展となる本商談会では約530社が出展し、2日間合計で約1万6400人が来場しました。

全農グループのブースでは、各社イチオシ商品を展示し来場者のメインである小売業態に向け、こだわり溢れる全農グループの国産農畜産物・加工品の提案を行いました。同ブース内にニッポンエールプロジェクト協議会と農協シリーズのブースを設置し、全農としての各取り組みについてもご紹介しました。

また、TACの店6団体（JAいわて花巻・JAいわて中央・JA岩手ふるさと・JA晴れの国岡山・JAやつしろ・JAあしきた）は、担い手から寄せられる販売力強化や産地の魅力発信への要望に応えるため、TACとJA販売部門が連携を強化し、各地の特色ある農畜産物や特産を使用した加工品等、地元商品のPRを行いました。

多くの来場者との商談を通じて各社ともに商品の引き合いがあり、成約に向けた継続的営業に取り組んでいます。

農協シリーズ・ニッポンエール、全農グループ会社の商品を合同で提案

TACの店では各地域の農畜産物や加工品の魅力を積極的にPR

「山形りんご2026」試飲販売会

発売開始から18年目の新春恒例商品

山形食品（山形県南陽市）は4日、東根市のJAさくらんぼひがしね直売所「よってけポポラ」で、1月1日から発売した「山形りんご2026」の試飲販売会を実施しました。

【山形県本部】

商品は、酸化防止剤（ビタミンC）を使用せず、2025年産の山形県産リンゴ「ふじ」のみを使用したストレート果汁100％ジュースです。口にした瞬間ふわっと香る爽やかな甘さは、まるでりんごをそのまま食べているような感覚です。

当日は、蛇口からりんごジュースが出る特製ディスペンサーで試飲を提供しました。試飲後に購入した女性は、「蛇口からりんごジュースが出たことに驚きました。フレッシュなりんごジュースが飲めてうれしい。早速、県外にいる息子に送りたい」と笑顔で話しました。

「山形りんご2026」商品

蛇口をひねって試飲を楽しむ参加者

JA全農の産地直送通販サイト

JAタウン ショップ紹介

おらほの逸品館

米どころ秋田を代表する郷土料理「きりたんぽ」。農家が自ら育てたこだわりのうるち米を使い、一本一本丁寧に手作りしています。

棒に巻いた形が「ガマの穂（たんぽ）」や「たんぽ槍」に似ていることから、それを食べやすく切るという意味で「きりたんぽ」と名づけられたとされています。

斜め切りにし、野菜や鶏肉と一緒に煮込む「きりたんぽ鍋」がよく知られていますが、さっとあぶってみそだれやしょうゆ、バターなどと合わせれば、おやつとしても楽しめます。

寒い冬に食べたくなる、香ばしい焼き目ともちもちとした食感を、ぜひご堪能ください。

手作りきりたんぽ 3本×5パック
…4,500円（税込み）

ご注文はこちらから

▶ JAタウンはこちらから https://www.ja-town.com
▶ お問い合わせは shop@ja-town1.com

発行／全国農業協同組合連合会　2026年（令和8年）2月23日発行（毎週月曜日発行）
第3534号　編集・発行人／広報・調査部　澤田洋志
〒100－6832 東京都千代田区大手町1丁目3番1号JAビル　TEL03（6271）8055

『JA全農トピックス』の公式Xはこちらから

私たち全農グループは、生産者と消費者を　安心で結ぶ懸け橋になります。